咳喘息患者に対する抗ロイコトリエン薬と長時間作用型β2刺激薬の効果比較

東京女子医科大学第一内科　横堀直子　玉置淳　永井厚志

咳喘息(CVA)は近年増加している疾患の一つであり、放置すれば30%前後が気管支喘息へ移行することから早期の治療介入が必要である。CVA治療の第一選択薬は現在、気管支拡張薬が用いられている。一方、抗ロイコトリエン薬の有効性については未だ十分に明らかにされていない。本研究では、CVA患者において、抗ロイコトリエン薬であるプランルカストの効果を長時間作用型β2刺激薬と比較検討した。対象患者はCVAと診断された年齢１６歳以上の患者31名（男性　13名　女性　18名）であり、プランルカスト群とキシナホ酸サルメテロール群の２群に分けた。プランルカスト群は450mg/day　朝夕２回内服、キシナホ酸サルメテロール群は100μg/day　　１日２回吸入を各群とも４週間投与し、咳点数、FEV1、PEF、喀痰中好酸球数・ECP、血液中好酸球数・ECPを測定した。プランルカスト群では、キシナホ酸サルメテロール群と比較して咳点数とFEV1では有意な改善を認め、好酸球性炎症においても改善傾向を認めた。これらの結果より、プランルカストは、咳喘息に対する第一選択薬として有効である可能性が示唆された。